

論	説
---	---

江沅『説文解字音均表』の成書と刊行

白 田 真佐子

1. はじめに

清代の江沅（字は子蘭、江蘇呉県の人、1767-1838）は文字学に秀でていた。『説文解字』に関する著作と言えば、『説文釈例』『説文解字音均表』及び『説文解字説』である。江沅はまず『説文釈例』を著わし、それは「釈字例」と「釈音例」からなり、その後に『説文解字音均表』を完成した。

筆者は『説文釈例』『釈音例』と『説文解字音均表』について、古韻分部¹⁾に基づく諧声表として研究を行っている。拙稿（白田1988）において、段玉裁（字は若庸、江蘇金壇の人、1735-1815）「古十七部諧声表」（『六書音均表』巻二）を「原型」と位置づけて諧声表の系統づけを開始し、これまで清代の学者の著作について稿本も含めて数多く閲覧してきた。「変型」にあたる諧声表は、白田1988で江有誥（字は晋三、安徽歙県の人、1773-1851）『諧声表』を取り上げ、王念孫（字は懷祖、江蘇高郵の人、1744-1832）『説文諧声譜』については簡単に述べ²⁾、黄以愚（字は深詩、浙江定海の人、1815-?³⁾）『声訓緯纂』と『重訂諧声表』は稿本を主体にして調べて、文章にまとめた⁴⁾。その他はまとめに時間がかかり、論文としては江沅『説文釈例』『釈音例』と『説文解字音均表』に関するものが大部分である⁵⁾。

そもそも、江沅『説文解字音均表』は、段玉裁の委託によって、弟子の江氏が編纂した書物である。ところが、清代に著わされた古韻分部に基づく諧声表について、序跋等を読んでも、段玉裁のことはもちろん出てくるが、江沅への言及は私の閲覧した範囲（稿本も含む）では余りなかった。段玉裁が江沅に託した試みは、どうやらしばらくの間、知られていなかったようである。これはなぜか。それは刊行年にあるとかねてから考えていた。そこで、刊行年に重点を置き、本稿では、『説文釈例』から『説文解字音均表』に至る成書と刊行の過程について、探求してみたい。本稿のタイトルには『説文釈例』が入っていないが、白田2013においても『説文解字音均表』の古韻分部について、『説文釈例』『釈音例』を含めて論じたという経緯がある。

2. 段玉裁「古諧声説」の江沅への継承

段玉裁は中国清代の著名な学者であり、『説文解字注』は「畢生の大著」⁶⁾と言われている。『六書音均表』も合わせて1815年5月に刻し終わり、9月に段氏は81歳で逝去した。その『説文解字注』より先に、『六書音均表』が1776年、四川で刊行され、それは富順官廨本である⁷⁾。当時、段氏は42歳で、四川で仕官していた。その『六書音均表』巻一には「古諧声説」が含まれ、段玉裁は「一声可諧万字、万字而必同部、同声必同部。」(一つの諧声符で一万字もまとめることができ、その一万字は必ず同じ古音の部で、同じ諧声符なら必ず同じ古音の部である。)と言う。さらに「古十七部諧声表」(『六書音均表』巻二)を著わし、古音十七部ごとに諧声符を列挙している。『説文解字』の親字は原則として小篆で記され、540の部首ごとに配列されている。段玉裁としては、自らの古音十七部説で、小篆を並べかえたかったのであるが、それは弟子の江沅に委託した。段氏の構想は、江沅によって実現を見たのである。

江沅は段玉裁の弟子で、『説文解字注』後叙⁸⁾を書く。文末に「嘉慶十有九年秋八月、親炙学者江沅謹拜叙於閩浙節署。」(嘉慶十九年〈1814〉秋八月、親炙学者の江沅、閩浙節署にて謹拝。)とあり、1814年8月の作と分かる。1815年5月『説文解字注』刊行の10か月前である。江沅は自ら「親炙学者」と言っている。一方、段玉裁は『説文解字音均表』序⁹⁾を書いていて、文末には「己巳三月」とあり、西暦でいえば1809年3月である。但し、江沅が1809年に『説文解字音均表』を書き終えていたとは、断定できない(この点については本稿4.1で述べる)。段玉裁は序をあらかじめ書いたに違いない。

以下に、段玉裁「『説文解字音均表』序」を引用する。

余撰『六書音均表』、析古音為十七部、其第二表既以『説文』九千余字之形声分隸十七矣。東原師既歿、乃得其答余論韻書、書後付一条云、「諧声字半主義、半主声。『説文』九千余字、以義相統¹⁰⁾、今作諧声表若尽取列之、使以声相統、条貫而下如譜系、則亦必伝之絶作也。」余頻年欲為之而未果、歲乙丑乃属江子子蘭譜之、略以第二表之列某声某声者为綱而件繫之、声復生声、則依其次第。三代音均之書不可見、読是可識其梗概焉。其有此彼可兩入、疑不能明者、略箋其異趣、使学者不以小異閼大同。江子用力甚勤、惜不令吾師一見也。己巳三月、段玉裁

私は『六書音均表』を書き、古音を分析して十七部とし、その第二表(「古十七部諧声表」)はすでに九千余りの形声を十七に分けた。東原(戴震の字。安徽休寧の人、1723-1777)師はすでに亡くなったが、私に答えて韻を論じる手紙を頂戴しており、その手紙に後に付された一条に次のようにある。「諧声字は半分が義(意味)を主とし、半分は声(発音)を主とする。『説文』九千余りの字は意味によって統一されているが、今諧声表を作って、字をすべて並べて声で統一し、筋道を立てて系譜のようにしていけば、必ずや絶作とな

る。」¹¹⁾ 私は毎年それをしようとしたが果たせず、乙丑の年（嘉慶10年〈1805〉）に江子蘭（江沅）に作ってくれるようにと託した。それは、およそ『六書音均表』第二表の某声・某声と並べているのを綱領として、これに関連づけ、声がまた声を生じれば、その順序に従うものである。三代音均の書¹²⁾ は見ることはできないが、これを読めば、その梗概を知ることができる。ここそこ二か所に入るべきものがあり¹³⁾、明らかにできないなら、その異趣をおよそ記し、学者が小異で大同を損なわないようにする。江沅は力を込めて励み、わが師戴震先生にお見せできないのが残念である。己巳（嘉慶14年〈1809〉）三月、段玉裁

『説文解字』は部首が540で、部首ごとに親字（基本的に小篆）を配列する。戴震は、これを諧声符ごとに並べかえることを段玉裁に示唆する。それは上の段氏序からわかる。段玉裁はそれを果たせず、歳乙丑（1805）に弟子の江沅に託したのである。

3. 江沅『説文釈例』の成書と刊行

江沅はまず『説文釈例』を著わし、それから『説文解字音均表』を著わした。『説文釈例』は「釈字例」と「釈音例」からなる。「釈字例」の一番目は「飾」で、『説文解字』には「拭」がなく、「飾」¹⁴⁾ があることを指摘する。ほとんど単字についての注釈で、文章としても22葉（『小学類編』所収本）に収まる。陶2011（132頁）は「釈字例」が注釈をつけている単字は212、複音詞は1とする。私が数えたところ、同数であり、複音詞とは「道服」¹⁵⁾ である。「釈音例」は段玉裁古音十七部に基づいて、諧声符を列举しており、全部で66葉（『小学類編』所収本）である。臼田1996・1997は「釈音例」と『説文解字音均表』との比較を試みている。「釈音例」の諧声符の数は『説文解字音均表』に比べると少ない。

江沅『説文釈例』のテキストとしては『小学類編』所収本がある。『小学類編』には李祖望の咸豊二年（1852）の序があるが、『説文釈例』の部分は、その封面の記載によれば咸豊元年（1851）刊行である。江沅は1838年に亡くなっていて、死後13年後の出版となる。「釈字例」の前に羅士琳（字は茗香、江蘇甘泉の人、1784-1853）の叙（1851）¹⁶⁾ がある。「釈音例」の冒頭には段玉裁「『説文解字音均表』序」（1809）があり、末尾には江沅による跋文（1811）がある。その他、『翠琅玕館叢書』所収本（光緒十六年〈1890〉）、『芋園叢書』所収本（民国二十四年〈1935〉）があるが、序跋は『小学類編』所収本を踏襲している。なお、北京大学図書館には呉棣生の筆写による『説文釈例』二卷（存「釈例」一卷）があり、その表紙には「説文釈音例 三冊 江子蘭撰 段懋堂序 呉棣生写本 茶穀藏」と毛筆で記されている。呉氏については清代の人としか分からない。江沅『説文釈例』のうち「釈音例」を筆写しているが、多少異なる点も見受けられる。呉氏の書物については未解明の点が多いが、江沅『説

『説文釈例』を研究する上で貴重な資料として、本稿では簡単に紹介しておきたい。

さて、『説文釈例』「釈音例」の末尾の跋文には、段玉裁が江沅に書物の編纂を委託したことを示す箇所があり、その部分を以下に引用しておく。なお、趙2004（429頁）では「説文釈例・編畢記」という表題である。

金壇段若膺先生精於小学、作『六書音均表』、以發明音誦之学。作『説文解字注』、以發明形与義之学。嘗欲因戴先生之説、以『説文』各部之字、以形類者編使声類於『六書音均表』、但有其端而未遑就也。沅自數年來時獲親炙於先生。漸明形義与声三者之理、循其次第、比而編之、大端既得、疑者闕焉。因人成事、罕所發明、別有管窺、俟諸異日。嘉慶辛未秋七月、江沅編跋記

金壇の段若膺先生は小学に精しく、『六書音均表』を著わし、音誦の学を發明した。『説文解字注』を著わし、形と義の学を發明した。嘗て戴震先生の説によって、『説文』各部の字が形類によるのを声類で『六書音均表』にまとめたかったが、その端緒はあっても、暇がなかった。私沅は數年来先生に機会あるたびに親炙することができた。だんだんと形義と声の三者の理を明らかにし、その次第に従い、比較して編纂し、あらましは得ることができ、疑問のあることは除いた。他人が成し遂げたことによっている¹⁷⁾ので、發明したことは少なく、他には管見があるだけで、後日の成果を待つ¹⁸⁾。嘉慶辛未（1811）秋七月、江沅編纂後記

以上の跋文は『説文釈例』の末尾にあり、『説文釈例』の編纂のことを述べていると考えるのは当然である。末尾の日付からすれば、1811年7月には『説文釈例』を書き上げていたことになる。ところが、これを『説文解字音均表』の序跋とみなすことも可能で、実際『江先生詩古文詞遺集』所収の『染香齋文集』（巻下）では「『説文解字音均表』叙」という表題である。江沅としては、『説文釈例』のみならず、その次の段階の『説文解字音均表』まで見据えて、上記の文章を書いたのではないだろうか。

ところで、『小学類編』は李祖望（1814-1881、字は賓嶠、江蘇江都の人）の編纂で、1851年の刊行である。すでに指摘したように、『説文釈例』には羅士琳の叙がある。その中で『説文釈例』のテキストに関する部分を引用してみよう。

稿本旧藏阮文達師家。已亥庚子間、文達師属録副本以詒同志、流伝時同邑李君賓嶠又从副本伝写一通。壬寅夏、避囂入郷、倉卒逐家、副本遺失。其明年福寿庭火、文達師所藏原本亦被燬、此書稿本不絶若線、実頼李君収録之功。

稿本は阮文達（文達は阮元の諡。字は伯元、江蘇儀徵の人、1764-1849）先生の家の旧藏であった。已亥から庚子（1839-1840）にかけて、文達先生は副本を作って同志に贈るようにし、流伝する時に同邑の李賓嶠（李祖望）君が副本から一通伝写した。壬寅（1842）

の夏、囂をさけて故郷に行き、あわただしく引っ越ししていると、副本を紛失した。その翌年（1843）阮元宅の福寿が火事となり¹⁹⁾、文達先生が所蔵していた原本もだめになったが、稿本が線のようにつながって絶えることがなかったのは、実に李君が収録した功績による。

以上引用した羅士琳による叙から、以下のことがわかる。『説文釈例』の稿本は阮元の家にあり、1839年から1840年にかけて副本を作り、李祖望も副本から筆写した。1842年副本が紛失し、翌年阮元宅も火事で稿本がなくなった。李氏が副本から筆写したものが『小学類編』に収録されている。1849年に阮元は逝去し、1851年『説文釈例』が『小学類編』所収として刊行された時、江沅逝去からしても13年経っていた。

4. 江沅『説文解字音均表』の成書と刊行

1851年『説文釈例』が『小学類編』所収本として刊行された時、江沅逝去から13年経っていたことは、前節で述べた。『説文解字音均表』の刊行についてはどうか。『説文解字音均表』には『皇清經解統編』本と稿本とがある。なお、『説文解字説』についても付記する。

4.1 『皇清經解統編』本

まず、江沅『説文解字音均表』は『皇清經解統編』に入っていて、これは閲覧が容易で、一般的に流布している。『皇清經解統編』本の『説文解字音均表』の冒頭には、段玉裁「『説文解字音均表』叙」が掲載されている。これは本稿の第2節で引用したものである。『説文釈例』「釈音例」の江沅による跋文は、『染香齋文集』では「『説文解字音均表』叙」という表題であることは第3節で述べた。但し、江沅「『説文解字音均表』叙」は『皇清經解統編』本には見えない²⁰⁾。

江沅の弟子である雷浚（字は深之、江蘇呉県の人、1814-1893）が「『説文解字音均表』跋」を書いており、丁亥（1887）という日付がある。この跋によると、雷浚が『説文解字音均表』の刊行に関わっていたことが読み取れる。『皇清經解統編』の刊行年について、虞2005（10頁）は「光緒十二至十四年（一八八六-一八八八）」と言う。雷浚の跋に記された丁亥（1887）は、ほぼ『皇清經解統編』の刊行年（1886-1888）にあたる。但し、『説文解字音均表』の『皇清經解統編』本には見えず、雷浚の文集『乃有廬雜著』に収められている。

以下、雷浚「『説文解字音均表』跋」を内容も考えて六段落に分け、第五段落まで原文と注を示していきたい。というのは、第五段落までは、『説文解字音均表』の成書と刊行の状況に関わるからである。今回第六段落²¹⁾を取り上げないのは、『小学類編』所収『説文釈例』で江沅の貫籍が元和（祖父江声の貫籍は元和）になっているが、正しくは呉県であることを

指摘していて、『説文解字音均表』とは直接関係がないためである。

(一) 道光庚寅辛卯間、浚負笈江先師之門。先師方草創、是書面承指授浚、与聞六書音韻之学、自此始。壬申別去、又数年、先師書成、旋卒。

道光庚寅辛卯の間（1830-1831、雷浚16-17歳）、私こと浚は勉学のため江先師の門下となった。先師はちょうど草稿を書いている、この書物を直接浚に伝授した。一緒に六書音韻の学を聞くのは、ここから始まった。壬申（1832）に別れ、また数年、先師は書物を書き上げると、すぐに亡くなった（1838）。

(二) 先師無子、嗣孫茂才元文以先師手書叢殘草稿七冊付与、而自藏其清本。庚申遭騒乱、予取藏草稿陷於家。江氏携清本出城中涂、被掠亦散失。

先師には子がなく、嗣孫の元文²²⁾ 茂才は先師の手書で残された草稿七冊を私に付与し、自らは清本を所蔵した。庚申（1860）の年騒乱²³⁾ に遭い、私が収蔵していた草稿は家で失った。江家の人は清本を携えて出城したが、途中で奪われて、これも散失した。

(三) 先是先師書成時、海寧許觀察槌写一副本去。至是海寧亦没於賊、觀察卒。許氏避兵去江北、副本存亡未可知也。

以前先師が脱稿した時、海寧の許槌（字は叔夏、浙江海寧の人、1787-1862）觀察が副本を書いて行った。その後、海寧も賊に屈し、許觀察も亡くなった（1862）。許家の人は兵を避けて江北に行き、副本の存亡もわからなくなったのである。

(四) 光緒乙酉国子監祭酒長沙王公奉命視学来江蘇、展転得副本於許氏。後人刻入『皇清經解統編』、知浚為江門老弟子、委以校讎、且許浚遇有疑義可以自案語。

光緒乙酉（1885）国子監祭酒長沙王公（王先謙、字は益吾、湖南長沙の人、1842-1917）が視学の命を受け江蘇に来訪し、展転として許家の人から副本を入手した。後人は『皇清經解統編』に入れ、浚が江門の老弟子であることを知ると、校讎を委託し、かつ疑義があれば案語をつけてよいと浚に許可した。

(五) 浚仰鑽高堅、莫窺万一。惟念先師少承其大父良庭徵君之学、中年親炙段氏、出入門下二十余年。始成此書、臨終有「此書不刻、我目不瞑。」之語。當時吳侍郎鍾駿、金孝廉鳳沼皆有意集資、而資不集、卒不果刻。今藉公之力畢先師之志、不特先師之目瞑、而浚亦無負先師臨終之言也。浩劫之後豈料復有此日哉。

浚は先師の学徳を仰ぎ慕うが、僅かなことも伺い知ることにはできない浅学である。思うに先師は年少の頃、その祖父良庭（良庭は江声の号。字は叔雲、江蘇呉県の人、1721-1799）徵君の学を受け、中年になると段玉裁氏に親炙し、門下に入出入りすること二十余年であった。やっとな『説文解字音均表』を書き終え、臨終には「この書が刊行されないと、私は目を閉じることはできず、死んでも死にきれない。」ということばを残した。

当時、呉鍾駿²⁴⁾ 侍郎、金鳳沼²⁵⁾ 孝廉にはみな資金を集める意思があったが、資金は集まらず、ついには刊行を果たせない。今、王先謙公のお力添えにより、先師の志を果たし、先師の目も閉じたばかりでなく、浚もまた先師臨終のことばに背くことがない。浩劫の後にまたこのような日が来るとは、思いもよらなかった。

以上の跋からわかる成書と刊行の状況であるが、江沅は『説文解字音均表』を完成させると、すぐに他界した。呉鍾駿や金鳳沼が刊行費用を集めようとしたが、集まらなかった。原稿自体も庚申の騒乱によって、存在が危うい時もあった。王先謙のおかげで『皇清經解統編』に『説文解字音均表』も収録されることになったのである。雷浚は、江沅の書物の脱稿から刊行までの経緯をよく知り、自ら校讎等を行っており、その上で「『説文解字音均表』跋」を書いている。雷浚による跋は、弟子の視点から書いたものとして評価できる。

なお、ここで特に付言しておきたいが、第二段落に見える江元文²⁶⁾ は、江沅の弟の孫で、江沅の跡継ぎであり、『江先生詩古文詞遺集』の刊行も行った。この文集の刊行は道光庚子(1840)で、1838年江沅が亡くなってから数年後である。

4.2 稿本

4.1 で述べたように、『説文解字音均表』は単刊ではなく、『皇清經解統編』の中に収められた。雷浚「『説文解字音均表』跋」が書かれた年(1887)に、『説文解字音均表』の部分が刊行されたと仮にみなせば、これは江沅の死後から49年後である。1815年段玉裁『説文解字注』が刊行されてから72年経っている。

『説文解字音均表』については稿本があり、これには特徴がある。清朝の稿本が今も保存され、さらに稿本の影印本も出版されていること、『皇清經解統編』本と稿本を比較対照した仕事があることである。前者を「a. 稿本の保存と影印本」、後者を「b. 『皇清經解統編』本と稿本を比較対照した仕事」として、以下に述べる。

a. 稿本の保存と影印本

次に、稿本は、管見の及ぶ限り3種ある。このうち、①③の稿本は影印本も出版されている。

①台湾・国家図書館蔵

②北京大学図書館蔵

③上海図書館蔵

まず、台湾・国家図書館蔵『説文解字音均表』(清稿本)には影印本がある。1974年に影印出版され、これは20世紀のことであり、江沅の死後136年後である。このテキストは、3種のうちで最も完成度の高いものである。北京大学図書館蔵本には今のところ影印本はない。テキストについて見ると、北京大学図書館蔵よりは台湾・国家図書館蔵のほうを整っている。

上海図書館蔵の稿本は第16部と第17部が現存するのみだが、道光二十九年（1849）江文煒（字は彤甫、江蘇金匱の人、?-1859²⁷⁾）跋があることで、資料面で価値がある。『統修四庫全書』に入っていて、影印本の形で見ることができる。この刊行は2002年で、時は21世紀始め、実に江沅の死後164年である。稿本3種の比較は、臼田2013において古韻分部を中心として行った。

b. 『皇清經解統編』本と稿本を比較対照した仕事

『皇清經解統編』本には文字の脱落等が若干ある。『皇清經解統編』本を底本にし、清稿本（上記の①台湾・国家図書館蔵『説文解字音均表』のこと）を照合したものは、説文会1994²⁸⁾である。校勘の結果について、主要な点を紹介する。以下の（1）（2）という引用は説文会1994、凡例Ⅱによる。なお、引用文中の『稿本』とは、上記の清稿本のことである。

（1）底本ではしばしば「～音」の掲出を脱しているので、『稿本』によって校正した。

（2）底本では左記の文字が脱落しているので、それぞれく > で囲んで書き加え、番号と記号を記した。

以上の引用について補足すると、原文は縦書きで、「左記の文字」とは「𣎵」「𣎵」「𣎵」「𣎵」の5文字である。特に後者の3文字については、それぞれを初声とする文字全部が関わる。「記号と番号」は、ここでは煩瑣を避けるため省略する。

上記の（1）（2）のような相違は、『皇清經解統編』本の不備であるが、『皇清經解統編』本と清稿本との本質的な違いは諧声符の配列である。但し、雷浚「『説文解字音均表』跋」を見ても、諧声符の配列については言及がない。頼・説文会1983（120頁）は次のように指摘する。

問 清稿本も統解本も同じ体裁ですか。

答 それが違うのです。清稿本は目次がついている他、いわゆる「初声」、つまり発展して行く諧声の一番始めの諧声ごとに、一まとめにして書いてあります。そして、その説文出現順です。

筆者も『説文解字音均表』第4部末・第9部末については調べたことがあるが²⁹⁾、この諧声符の配列については別稿で述べることにしたい。

なお、稿本については、臼田2013発表後に、さらなる稿本が判明した。それは南京図書館蔵『説文解字説』で、2013年12月下旬閲覧したところ、わずか5葉の手稿で、「『説文解字音均表』弁言」と重複する部分がある。「『説文解字音均表』弁言」は、『皇清經解統編』本の『説文解字音均表』で言えば、第一巻の前にある。（但し、清稿本では「弁言」の中で「附」となっていて、『皇清經解統編』本とは異なる。）「弁言」は単なる凡例でないことは確かで、総論とはいかなくても、いわば“説文解字説”に相当する内容とみなしてよいかもしれない。

5. おわりに

江沅『説文解字音均表』は、段玉裁の委託によって、弟子の江氏が編纂した書物である。段玉裁が江沅に託した試みは、どうやらしばらくの間、知られていなかったようである。刊行年に重点を置き、本稿では、『説文釈例』から『説文解字音均表』に至る成書と刊行の過程について、探求を行った。以下に、まとめていきたい。

段玉裁『説文解字注』は『六書音均表』も合わせて1815年5月に刻し終わり、9月に段氏は81歳で逝去した。その『説文解字注』より先に、『六書音均表』が1776年、四川で刊行され、それは富順官廨本である。段玉裁は「十七部諧声表」（『六書音均表』巻二）をもとに、諧声符ごとに『説文解字』の小篆を並べかえることを意図していたが、自分では果たせなかった。段氏は1809年「『説文解字音均表』序」を書いていて、その序によると、1805年に段玉裁が江沅に著作の委託をしたことがわかる。委託を受けた江沅は、1838年、『説文解字音均表』を脱稿すると、すぐに逝去している。

江沅はまず『説文釈例』（「釈字例」「釈音例」）を著わし、それから『説文解字音均表』を執筆した。江沅『説文釈例』のテキストとしては、『小学類編』所収本が早く、『説文釈例』の部分は1851年刊行であるが、江沅の死後13年後の出版である。江沅『説文解字音均表』は『皇清經解統編』に入っており、一般的に流布している。『皇清經解統編』本の刊行年は1886年から1888年にかけてである。弟子の雷浚による「『説文解字音均表』跋」は『説文解字音均表』の成書と刊行を知るのによい資料である。これが1887年の日付になっているので、『説文解字音均表』の部分を1887年刊行と仮にみなせば、江沅の死後49年である。1776年段玉裁『六書音均表』が刊行されてから111年、1815年段氏『説文解字注』が刊行されてから72年経っている。（なお、『説文解字音均表』については稿本があるが、ここでは繰り返さないことにする。）『説文解字音均表』の刊行が遅々として進まず、書物として流布するのが遅かった。刊行の資金不足、庚申の騒乱等が出版の障害となったことも明らかになった。『説文解字音均表』の存在は江沅の師友や弟子は知っていても、刊行の遅れが甚だしく、世間に知られるのが遅れたと推定できる。

注

- 1) 古韻分部は清代古音学の中心的課題である。清代における古韻分部の変遷を調べることに、上古音研究史としての価値を見出すことができる。筆者は「学界展望2012年度・語学・音韻 1. 上古音」(臼田2013、46頁)で次のように述べたことがある。「清朝の古音学研究は主に古韻分部に関するもので、音価推定までは至らなかった。現在では上古音研究史としての価値があり、大陸・台湾とも研究は衰えることがない。」筆写自身による翻訳は臼田2015(76頁)参照。
- 2) 臼田2002b(978-980頁)参照。
- 3) 「定海黄氏世系表」(王2000)には「黄以愚 式三長子。字深詩、号徹孟。約生於嘉慶十九年。道光二十九年副貢生。著有『声訓緯纂』『雜著』。子一。」とあり、嘉慶十九年は1814年である。「黄式三黄以周世系表」(王2011)は「嘉慶二十年三月十日生。」と断定する。嘉慶二十年は1815年である。
- 4) 臼田2010、2012参照。
- 5) 臼田1996、1997、1998a、1998b、2001、2002a、2013a 参照。
- 6) 頼・説文会1983(65頁)に次のようにある。「乾隆四十一年(一七七六)四十二歳のときに着手、嘉慶十二年(一八〇七)七十三歳で落成、嘉慶二十年(一八一五)五月に刻し終りました。そしてその年の九月八日に八十一歳で卒したというのですから、文字どおり畢生の大著です。」
- 7) 段玉裁『六書音均表』富順官解本は、日本ではなかなか閲覧できず、筆者は北京大学図書館で閲覧した。
- 8) 段玉裁『説文解字注』第十五卷下の後に見える。また、江沅『染香齋文集』(『江先生詩古文詞遺集』所収本)巻下にも収録されている。
- 9) 『経韻楼集補編』(『段玉裁遺書』所収本)巻上に「江子蘭『説文解字音均表』序」がある。この序については鍾敬華氏による校点もある(『経韻楼集』、377頁参照)。また、本稿注10)も参照。
- 10) 『経韻楼集補編』(『段玉裁遺書』所収本)巻上「江子蘭『説文解字音均表』序」は「以篆相統」、『皇清經解統編』本の『説文解字音均表』冒頭の段玉裁「『説文解字音均表』叙」は「以義相統」にそれぞれ作り、相違がある。そもそも戴震「答段若膺論韻」(『戴震文集』巻四)は「以義相統」に作る。そこで、本稿では「以義相統」で解釈した。
- 11) 倉石1942(32頁)の訳を参考にした。原文は旧字・旧仮名遣いである。「はじめ戴震が段玉裁に与へた書の中に「諧声の字は半は義を主とし半は声を主とするが、説文の九千余字は義をもつて統一されてゐる。いま諧声表を作つて諧声の字をことごとく並べ、声をもつて統一し、ちやうど系譜のやうに筋みちをつけたならば、すばらしいものになるであらう」といふことばがあつた。」この倉石訳の中で、「すばらしいもの」とは「絶作」の訳であるが、本稿では「絶作」という原文の表現をそのまま生かした。そのような訳は本稿では散見する。
- 12) 『説文解字』「一」の段注(一上・1a)に「又恐学者未見六書音均之書。不知其所謂、乃於『説文』十五篇之後、附『六書音均表』五篇。」とある。(なお、段注とは段玉裁『説文解字注』の略称。以下同様。)"六書音均之書"について、頼・説文会1983(217頁)に次のようにある。「段氏は『六書音均表』に相当するような書物が昔あったと考えているのだと思います。」
- 13) 「其有此彼可兩入」とは、次のようなことを意味しているに違いない。「江沅説文解字音均表攷正両見リスト」(説文会1994)には、複数の部(大部分は二つ)に重複して出る字が並んでいる。例えば、「元」(段注は一上・1b)は『説文解字音均表』では第14部と第5部に両見する。「元」については、頼・説文会1983(149-150頁)に詳しい。段玉裁によれば、一つの諧声符は一つの部に所属するのが原則であり、この点については段玉裁「古諧声説」(『六書音均表』巻一)参照(本稿第2節に引用)。
- 14) 「飾」の段注(七下・50a)参照。
- 15) 「道服」について、陶2011は詳しく述べていない。『説文釈例』『釈字例』には「道服、此許書之禪服也。」云々とある。「禪」の段注(一上・17a)も参照のこと。

- 16) 趙2004(429頁)は羅士琳「『説文釈例』叙」をもとに、江沅『説文釈例』と王筠(字は貫山、山東安邱の人、1784-1854)『説文釈例』との関係を論じている。
- 17) 『史記』卷七十六「平原君虞卿列伝」に、毛遂の言葉として「公等録録、所謂因人成事也。」とある。
- 18) 戴震「『爾雅文字考』序」(『戴震文集』卷三)も「姑俟諸異日。」の一句で終わる。李開1992(289頁)に次のようにある。“从书序中‘姑俟诸异日’一句话看，戴震对其著作还有不满意之处，等待日后再作修改。”ここは論述の必要から原文通りの表記とする。なお、本稿では原則として、中国の文献についても常用漢字で記している。
- 19) 『阮元年譜』(208-209頁)には次のようにある。「道光二十三年癸卯(一八四三)、年八十歳。(中略)三月初三日(中略)是夜、福寿庭燬於火。」なお、『阮元年譜』の原題が『雷塘庵主弟子記』であることについては、黄愛平「点校説明」(『阮元年譜』巻頭1-2頁)参照。
- 20) 「4.2 稿本 a. 稿本の保存と影印本」に掲げた稿本3種も同様。
- 21) 第六段落については原文のみ掲げる。「先師祖父皆籍元和、先師籍吳興。我郡吳長元三県同城、通考祖孫父子異籍者頗多、不為異也。咸豐初江都李氏刻先師遺著『説文釈例』、誤署元和江某、不可以不辨並辨之。」
- 22) 江元文は、江沅の弟の孫で、江沅の跡継ぎであり、それは以下の文献に見える。『江先生詩古文詞遺集』に朱綬(字は酉生、江蘇元和の人、1789-1840)による江沅の伝があり、「先生娶于戴、無子、以弟之孫元文為後、女二人王嘉祥及諸生陳煥其婿也。元文哀輯先生詩文集既成。」と見える。朱綬による伝の日付は、道光己亥(1839)である。なお、江元文については、『皇清書史』(巻二)に「吳興人。」云々とあり、出典は『裏竹居檢書記』となっている。生没年不詳。
- 23) 「庚申遭騷亂」(以下、本稿では「庚申の騷亂」と呼ぶ)のみでは、その具体的内容が決めがたい。雷浚「合刻四家詩詞叙 甲申」(『乃有盧雜著』。甲申は光緒十年(1884))に「咸豐庚申四月、粵匪陷郡城拋之。」とあり、粵匪(太平天国軍)が郡城を陥落し、占拠したことがわかる。郡城が蘇州城を指す根拠については、以下に述べる。汪徳門『庚申殉難日記』や蓼村遁客『虎窟紀略』は太平天国軍が蘇州を攻略したことについて記しており、茅1979に収録されている。これらの文章の冒頭には、茅1979の編纂者による「説明」がそれぞれ付いている。汪徳門『庚申殉難日記』に「庚申四月十三日、黎明、城門失守、街坊大乱。」(茅1979、1頁)とある。冒頭に付された「説明」(茅1979、1頁)によれば、汪氏は商人である。蓼村遁客『虎窟紀略』に「(庚申四月)十三日、賊入蘇城。」(茅1979、15頁)とあり、賊(太平天国軍)が蘇州城に入ってきたことがわかる。『虎窟紀略』の冒頭に「説明」(茅1979、12頁)が付いていて、それによると蓼村遁客は吳興の人で、姓は汪である。雷浚も吳興の人であるが、この二人に面識があったか否かまではわからない。雷浚「合刻四家詩詞叙 甲申」や汪徳門『庚申殉難日記』や蓼村遁客『虎窟紀略』を資料に考えるに、「庚申遭騷亂」とは、蘇州陥落とそれに伴う社会変動を指すに違いない。なお、4月13日は旧暦による日付であり、新暦では6月2日にあたる。董蔡時1981(25頁)によると、洪秀全の命を受けた李秀成は、1860年6月2日清の江蘇省城蘇州を攻略している(原文は「攻取清江蘇省城蘇州」)。
- 24) 吳鍾駿(字は吹声・崧甫、江蘇吳興の人、1798-1853)は『吳県志』(巻六十六下、列伝四)に「道光壬申一甲一名進士。」とあり、つまり、1822年に状元となる。『吳県志』には「咸豐三年卒於福建学政、任賜祭葬、年五十有五。」とあり、生没年がわかる。姜・陶1959/1985(730頁)で、吳鍾駿の生年を不明とし、没年を1843年とするが、本稿では『吳県志』に従う。
- 25) 金鳳沼(字は藹如、生没年不詳)は『吳県志』(巻六十六下、列伝四)に「道光壬申举人。」とある。『俳律初津』を編纂しており、その巻一目(目録に相当)冒頭に「吳県金鳳沼藹如編并註」とある。金氏自身の序跋はないが、「同治八年春日里人馮桂芬識」という馮桂芬(字は林一、江蘇吳興の人、1809-1874)の序はある。『俳律初津』の中には吳鍾駿(注24参照)の作品も掲載されている。雷浚の言う金鳳沼は、この人を指すに違いない。一方、金錫鬯(字は蓍穀、浙江桐郷の人、1767-1838)の長男も金鳳沼である。瞿中溶・『瞿木夫先生自訂年譜』(五年乙酉五十七歳)「金蓍穀娶婦鬯錫、長子彦甫鳳沼」とあり(五年乙酉は1825年)、字が彦甫であることは分かるが、生没年不明。金鬯錫『晴韻館收藏古錢述記』の自序(道光五年(1825))に「与兒子鳳沼互相蒐輯。」と見える。蔣

湘南「誥授朝議大夫知府銜廣東嘉應直隸州知州金君錫鬯墓誌銘」（『碑伝集』巻一百十）に「嘉慶十年錢恭人**卒。生男子、子一曰鳳沼、廣東塩運司知事副室。」とある。江蘇呉県と浙江桐郷という場所の違い、諱如と彦甫という字の違いで、桐郷と呉県金鳳沼を同一人物とみなすのは難しい。なお、以下に*と**の付いた箇所について、補足説明をしたい。*瞿中溶（字は木夫、江蘇嘉定の人、1769-1842）は錢大昕（字は曉徵、江蘇嘉定の人、1728-1804）の女婿。嘉定は現在上海市に属す。**金錫鬯は錢大昭（字は晦之、江蘇嘉定の人、1744-1813）の女婿。錢大昕は錢大昭の兄。

26) 注22) 参照。

27) 『皇清書史』（巻二）に、「江文煒、字彤甫、江孫。金匱籍、貢生。咸豐九年殉難。治說文、工小篆。」とあり、出典は許淮祥『猗叟詩録』となっている。江文煒は『説文解字音均表』跋で、江沅のことを「先大夫」（亡くなった祖父）と記している。江文煒と江元文との関係が不明であることは、白田2013（298頁）でも言及した。

28) 説文会1994を発展させたものは、藤山1998である。

29) 第4部末については白田2002a、第9部末については白田2001をそれぞれ参照。

参考文献

藤山和子（研究代表者）1998.『『説文解字』データベース化のための検索システムコード番号表』（Ⅰ一篆一行本篇、Ⅱ段注本篇、Ⅲ音均表篇）、平成7-8年度文部省科学研究費補助金による基盤研究B「総合的漢字研究のための『説文解字』のデータベース化とそれを利用した基礎的研究」の研究成果報告書。

倉石武四郎1942.「六書音均表について」、『支那学』第10巻特別号、147-192頁。

頼惟勤（監修）・説文会（編）1983.『説文入門』、大修館書店。

説文会1994.『江沅説文解字音均表攷正』、説文会、お茶の水女子大学中国文学研究室内（1994年当時）。

白田真佐子1988.「諧声符配列法の原型とその変型」、『中国語学』、第235号、1-14頁。

——1996.「江沅『説文釈例・釈音例』の初声について —『説文解字音均表』との比較を中心に—」、『お茶の水女子大学中国文学会報』、第15号、（左）59-75頁。

——1997.「江沅『説文釈例・釈音例』の初声の配列 —『説文解字音均表』への発展」、『お茶の水女子大学人文学部紀要』、第50巻、121-137頁。

——1998a.「江沅『説文解字音均表』から見る段玉裁の増加字と諧声符」、『お茶の水女子大学中国文学会報』、第17号、69-86頁。

——1998b.「江沅『説文解字音均表』における増加字と諧声符」、『中国言語文化論叢』（東京外国語大学中国言語文化研究会）、第2集、143-164頁。

——2001.「論江沅『説文解字音均表』和諧声符 —以第9部（東・冬）的最后部分為主—」、『お茶の水女子大学中国文学会報』、第20号、（左）16-22頁。

——2002a.「論江沅『説文解字音均表』第4部最后部分的諧声符」、『文学論叢』（愛知大学文学会）、第125輯、257-266頁。

——2002b.「論研究〈王念孫の古音学〉上の文献資料——1990年の研究と2002年の補遺——」、『第七屆清代學術研討會論文集』、台湾：中山大学清代學術研究中心・中国文学系、977-987頁。

——2010.「黄以愚『声調緯纂』稿本抄本と古韻分部」、『文学論叢』、第142輯、98-116頁。

——2012.「国家図書館蔵の黄以愚『重訂諧声表』の古韻分部」、『文学論叢』、第145輯、163-178頁。

——2013a.「古音学与江沅『説文解字音均表』」、葉宝奎・李無未（主編）『黄典誠教授百年誕辰紀念文集』、中国：厦門大学出版社、295-300頁。

——2013b.「学界展望・中国語学・音韻文字訓詁」、『日本中国学会報』第65集、（左）45-50頁。

——2015.「漢語音韻研究在日本（2011-2012年）」、『語言歷史論叢』（四川師範大学漢語研究所）、第8輯、中国：巴蜀書社、68-81頁。

- 董蔡時1981.『太平天国在蘇州』、中国:江蘇人民出版社。
- 姜亮夫(纂定)・陶秋英(校)1959/1985.『歷代人物年里碑傳綜表』、台湾:文史哲出版社。
- 李開1992.『戴震評伝』、中国:南京大学出版社。
- 林慶熙1979.『段玉裁之生平及其學術成就』、台湾:中国文化学院中国文学研究所博士論文。
- 茅家琦(前言)1979.『太平天国資料專輯』(『中華文史論叢』增刊)、中国:上海古籍出版社。
- 陶生魁2011.「淺議江沅『說文積例·積字例』」、『殷都學刊』、2011年第1期、132-136頁。
- 王逸明2000/2011.『定海黃式三黃以周年譜稿』、『新編清人年譜稿三種』之一、中国:学苑出版社。
- 虞万里2005.『『正統清經解』編纂考』、阮元・王先謙(編)『清經解 清經解統編』卷、中国:鳳凰出版社、1-28頁。
- 趙錚2004.「也談江沅『說文積例』的性質」、『湖北大學學報 哲學社會科學版』、第31卷第4期、429-431頁。
- 曹允源等(纂修).『吳縣志』八十卷、民國二十二年(1933)鉛字本(台灣:成文出版社、1970年影印)。
- 戴震(撰)、趙玉新(點校).『戴震文集』、中国:中華書局、1980年。
- 段玉裁.『六書音均表』五卷、富順官廨本(北京大學圖書館藏)。
- .『說文解字注』三十卷『六書音均表』五卷、經韻樓本(中国:上海古籍出版社、1981年影印)。
- .『段玉裁遺書』、台灣:大化書局、1977年。
- 、鍾敬華(點校).『經韻樓集』、中国:上海古籍出版社、2008年。
- 江沅.『說文積例』二卷、『小學類編』所收本(咸豐二年〈1852〉序刊、『說文積例』は咸豐元年〈1851〉刊。台灣:華文書局、1970年影印)。
- .『說文積例』二卷、『翠琅玕館叢書』所收本(光緒十六年〈1890〉)。
- .『說文積例』二卷、『芋園叢書』所收本(民國二十四年〈1935〉)。
- .『說文積例』二卷(存「積例」一卷)、北京大學圖書館藏抄本(吳棣生寫本)。
- .『說文解字說』一卷、南京圖書館藏抄本。
- .『說文解字音均表』十七卷、台灣:國家圖書館藏稿本。清代稿本百種彙刊本(台灣:文海出版社、1974年影印)。
- .『說文解字音均表』十七卷、『皇清經解統編』本(台灣:芸文印書館、1965年影印)。
- .『說文解字音均表』十七卷、北京圖書館藏稿本。
- .『說文解字音均表』二卷、上海圖書館藏稿本(江文煒跋)。『統修四庫全書』247、中国:上海古籍出版社、2002年。
- .『江先生詩古文詞遺集』七卷、『清代詩文集彙編』484、中国:上海古籍出版社、2010年。
- 金鳳沼(輯注).『排律初津』四卷、同治八年(1869)序刊本。
- 金錫鬯.『晴韻館收藏古錢述記』十卷、手稿本(中国:上海中國書店影印、民國十九年〈1930〉)。
- 雷浚.『乃有廬雜著』一卷、『清代詩文集彙編』656、中国:上海古籍出版社、2010年。
- 李放.『皇清書史』三十二卷、『遼海叢書』第3冊、中国:遼瀋書社、1985年。
- 錢儀吉(編).『碑傳集』一百六十卷、台灣:文海出版社、1973年(影印)。
- 瞿木中.『瞿木夫先生自訂年譜』一卷、嘉業堂叢書本(吳興劉氏嘉業堂刊本、民國二年〈1912〉)。
- 司馬遷.『史記』一百三十卷、中国:中華書局、1975年。
- 張鑑等(撰)、黃愛平(點校).『阮元年譜』、中国:中華書局、1995年。

